

書評

の反政府運動の高まりと 1864 年のポーランド蜂起に対する愛国的熱狂の中で、政治運動としてのロシア自由主義は消えて行く」。

西欧的な観念によれば「自由主義」とは何よりも君主権力の否定にこそその本質が認められねばならない。従って、イギリスのように君主を残すかフランスのようにこれを抹殺するかは別にして、立憲制こそが「自由主義」の多様性を貫く共通項であるの対して、「ロシア自由主義」の特質は専制体制の維持を前提とし、ツァーリ権力による改革を標榜しているところにある。とすれば、このような思潮が「自由主義」と

呼ぶに値するかどうか、疑問なしとはしないのだが、「ロシアの」自由主義とは元来このようなものだとして記述されてしまえば、それなりに得心せざるをえない。「ロシア自由主義」を論ずることの難しさは、この曖昧さにあると思われるが、杉浦氏の著作からは、西欧と異なる政治風土の中で西欧的な理念を追求しようとする人たちの苦悩の跡がよく見えてくるのである。

なお、ほぼ時期を同じくして竹中浩氏が『近代ロシアへの転換——大改革時代の自由主義思想』（東大出版会、1999 年）を刊行している。併読を勧める。

（ながなわ みつお・横浜国大）

秋月俊幸著『日本北辺の探検と地図の歴史』

北海道図書刊行会、1999 年、405+iii+44 頁、図版 5 頁、付録地図 1 枚

竹 内 啓 一

北海道、南千島、サハリンなど日本の北辺は、両極地方を別にすれば、世界図で一番最後まで不明であった地域である。同時に間宮林蔵の調査、伊能忠敬の測量、高橋景保の「日本辺界略図」（1809）の作成など、地図上の空白を埋めるのに日本人が果たした役割が強調される地域でもある。古地図および史料にあたって、この空白がどのようにしてうめられてきたかということを実証的に検討する作業は、第二次世界大戦前、藤田元春によって緒が就けられたが、本格的な研究は、第二次世界大戦後、高倉新一郎、船越昭生などによってすすめられた。このたび出版された本書は、その題名が示すように、この地域の探検と地図の歴史の、従来の研究を総括するものであるとともに、多くの点で画期的前進をもたらしたものである。著者は、大学卒業後、停年

退官まで 30 数年間にわたり、北海道大学附属図書館および法学部に勤務した歴史家である。その大部分は、日本北辺の探検史と地図史との研究に没頭する研究職にあったわけではないが、同図書館が所蔵し、体系的な検討がなされることがなかった地図類と関係史料とを長年にわたって丹念に検討し、さらに関連するいくつかの文献や地図にあたって考察した成果が本書である。今後この分野の研究者が、必ず踏まえなければならない古典になるであろう書物である。

17 世紀前半、松前藩の国絵図およびイエズス会士アンジェリスの地図からときおこされているが、日本北辺図の混乱の発端を、著者秋月は、1643 年のオランダ航海者フリースの航海にしている。これにもとづく地図が 18 世紀末まで、西ヨーロッ

ロシア語ロシア文学研究 32 (2000)

パでは 140 年以上も唯一の実測地図として権威を持ち続けたのである。フリースの航海に続いて北辺の地図に混乱をもたらしたのは、18 世紀になってからのロシア人によるカムチャッカ、アリューシャン、千島などの調査であって、著者の言葉によれば、フリースの手書き地図にあらわれ、日本人がエゾと呼んでいたものが、ロシアによる北方探検の結果、島々の集合体になってしまったのであった。ロシア側の地図資料を丁寧に検討したのは、秋月の大きな功績である。もうひとつこの著者の重要な功績は、18 世紀初頭に中国全土の実測の結果作成された「皇輿全覧図」のアムール河口部分の検討である。「康熙図」はすでに船越昭生によって、北方図との関連で注目されたが、船越はもっぱら、ロシア、イギリス、フランス、オランダ製地図を通じての日本における間接的受容および 19 世紀になってからの日本への直接的影響を検討したのであって、秋月による検討は、ロシアおよびフランスの地図製作にそれがどのように伝えられたかを検討したものである。

18 世紀後半になって、幕府および松前藩が北辺に関心を持つようになったとき、まず最初にしたのは、ロシアを含むヨーロッパ航海者たちの探検の結果作られた地図をさまざまなかたちで受容することであり、この点で、秋月が山田聯の仕事を検討した部分は注目に値する。カラフトが外国地図のサハリンであることを同定したのは高橋景保の重要な業績であるが、山田の仕事がなければ、おそらく高橋の画期的な仕事も生まれなかったと考えられるのである。

本書の記述は、明治初期の北海道・千島の測量にまでおよんでいるが、中心的テーマであり、白眉をなすのは、長く残った地図上の空白が、西ヨーロッパ、ロシア、そ

して日本の探検家と地図制作者によってどのようにうめられていったかを、地図製作者の間の影響関係にも注目しながら、説得的に示した部分であろう。したがって、重要な史資料は地図であり、探検・調査の記録はどちらかというと補完的に利用されているが、探検・調査の記録の吟味となれば、各国の古文書館での作業が主になるであろうし、これは将来の研究者がしてくれることになるであろう。

大変に分厚い読みごたえのある書物であるが、著者は明らかに、限られた研究者のみではなく、広い一般読者を念頭に置いて本書を著したと考えられる。それ自体大変な業績であるが、人名、用語などに関して、脚注というかたちで丁寧な解説が付せられているし、全体の構成が、いわば謎解きのような大きな物語になっていて、一般読者も、ドラマとして本書の記述を読むことができる。著者もはつきり断っているように、本書は先行する内外の業績に多く負っていて、巻末の文献表は、この分野における文献をほとんど網羅していて、研究者にとって大変に有り難いが、個々の記述に関していえば、それが誰のどのような研究に負っているのかが明示されていないうらみがある。これは一般読者をも念頭に置いて、読みやすい記述にしたことによって、書誌的な、ある意味では煩瑣な学問的厳密さが犠牲になったのであり、この点で研究者には不満が残るかもしれない。しかし評者は、これが本書のもつ大きな学問的価値をそこなっているとは考えない。巻末に英文要旨がつけられているが、これは本書がもつ国際的な学術的価値に関しての、著者の並々ならない自信を示すものであろう。

(たけうち けいいち・駒澤大・

元日本地理学会会長)